



現状の北運河

Current situation of the North canal

観光都市となった小樽の現状や海外の例をヒントに
小樽観光の課題や北運河の今後の方向性を考える。

小樽観光の課題と北運河への着目



■小樽観光の課題

小樽運河の整備を契機として小樽観光が生まれて30年近くが経過している。

現状の小樽観光は、宿泊率が低い通過型観光、観光と市民生活のかい離、商業主義による「小樽らしさ」の消失、夜間は閑散とする観光街など、課題は多岐にわたる。10年以上にわたる運河論争が全国に報道されたことにより小樽の知名度が高まり、それに伴い観光都市に急激に変貌したことによるひずみが様々な形で現われている。これらを要約すると、ブランディングやサービス・ホスピタリティの不足が共通の課題であるとともに、観光関連の事業者をはじめ市民全体の意識改革とこれらを解決する取組が急務の課題となっている。

一方、小樽にはかつて隆盛した港湾周辺の産業遺産や北のウォール街と称された銀行の建物群、当時の繁栄ぶりを物語る歴史的建造物が数多く存在している。運河保存運動の「守って残し再生しよう」という思いが次代に繋いだ歴史的街並みは小樽の大切な宝であり、これからの小樽再生のための魅力的な資源でもある。

■観光拠点としての北運河

北運河は、埋め立てされることなく建設当初の幅40mのまま現存し、昭和57（1982）年以降に護岸や散策路が整備された。

北運河周辺地域には、明治20年代に建設された北前船主の石造倉庫群、明治39（1906）年建築の国指定重要文化財旧日本郵船（株）小樽支店、大正12（1923）年に竣工した埋立地に立地する北海製罐の工場群が建ち並んでいる。

現在、北運河には往年の活躍が偲ばれる舳や現役の漁船・クルーザーなどが係留され、周辺の石造倉庫など歴史的建造物はコンサートホールやカフェ、シェアハウスなどに再利用されており、これらが相俟って小樽の原風景を形づくっている。

北運河および周辺地域の中心施設である運河公園は、憩いの場として、またイベント会場として多くの市民に利用されており、その他の施設も観光資源となる高いポテンシャルを有している。そのため、この地域は小樽市民が誇りを持てる観光拠点として再生することが期待されている。

小樽市を訪れる観光客数

■平成 25 年度上期の状況

平成24(2012)年度の年間観光入込客数は、東日本大震災の影響により大きく減少した同23年度対比で109.3%の659万9000人となり、震災前の同22年度との対比でも98.8%となり、ほぼ震災前の水準に回復した。

平成25年度上期においては、観光入込客数は円安傾向による国内旅行の増加、昨年から新千歳空港に就航した格安航空会社(LCC)の好調な運航、小樽市においては「オーズ春香山ゆり園」の開園や2年目を迎えた「運河クルーズ」が人気を集めたことなどにより、前年度同期を上回り約16万人増の391万9300人となった。また宿泊客数も、同13年度から概ね減少傾向にあったが、今年度は対前年比で1万6800人増加して37万1900人となり、同20年度の水準まで回復した。特に外国人宿泊客数は、海外航空路の増加・充実、円安による追い風などにより、対前年比168.5%の3万4034人と大幅な増加となり過去最高を記録した。国別では、タイ、台湾、韓国、シンガポールからの宿泊客数が大きな伸びを示した。

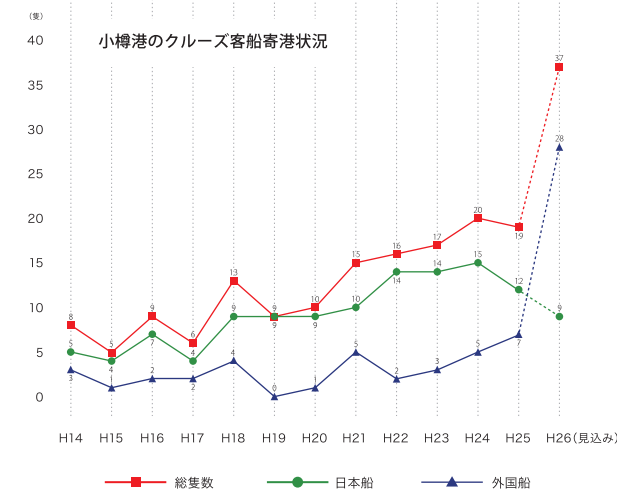
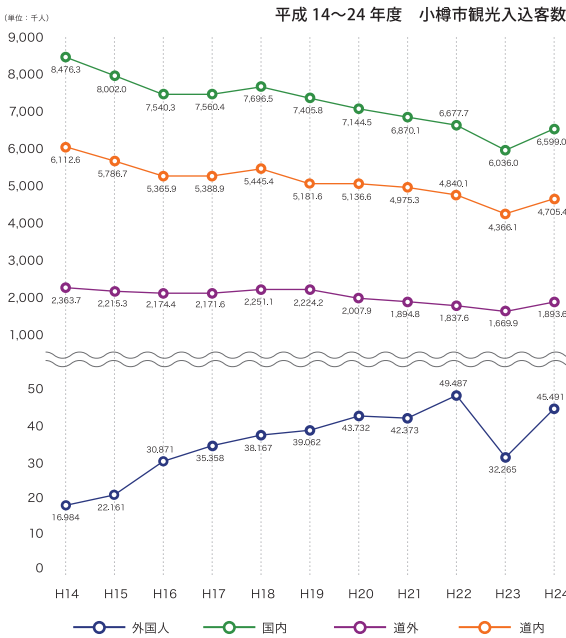
小樽での滞在時間（日帰り客）

- ・日帰り客の滞在時間は、全体で4.4時間となっている。
- ・道内外別では、道内客は4.7時間、道外客は4.2時間となり、前回調査と比べて、道内客は0.4時間減、道外客は0.3時間減となった。
- ・訪問回数別では、はじめての来訪は4.1時間であるが、4回目以上は4.7時間となっており、リピーターの滞在時間が長い傾向がみられた。

（小樽市HPを参照した）



平成25年は6月1日の「プレーメン」の寄港を皮切りに、10月26日の「にっぽん丸」まで、日本のクルーズ客船が12回、外国のクルーズ客船が7回、延べ19回寄港した。



小樽市の人口変遷

小樽市の人口は、昭和39（1964）年の約20万7000人をピークに減少し続け、平成25年の人口は13万人弱となっている。減少傾向は尚も続き、平成30年には11万人にまで落ち込むと予想されている。

人口減少に伴い、市街地は密度の低い状態になっており、また65歳以上の高齢者が30%を超える高齢化の街となっている。

小樽は、大都市札幌の中心部から時間軸距離にして1時間に満たない自然豊かで歴史のある住環境を有しており、その潜在力をまだ十分には発揮できていない。

